

平戸藩と平戸焼

【目次】

- 第1章 肥前平戸焼を考察するならば
- 第2章 平戸三川内焼を研究する方向性について
- 第3章 大航海時代の中国海人と西海海人
- 第4章 鄭成功と平戸焼
- 第5章 平戸焼誕生を考える
- 第6章 平戸藩窯の遍歴と年代順
- 第7章 平戸中野窯（不明～1640年）
- 第8章 平戸藩長葉山窯
- 第9章 平戸藩新窯（1630年～明治）
- 第10章 三川内山、東窯、西窯
- 第11章 肥前の分業体制下
- 第12章 王直について
- 第13章 鉄砲伝来について
- 第14章 鄭芝龍について
- 第15章 鄭成功について
- 第16章 田川まつについて
- 第17章 平戸焼と巨関（きょせき）について
- 第18章 唐臼について
- 第19章 平戸三川内焼と鎮信流茶道
- 第20章 平戸焼の魅力
- 第21章 混合粘土と平戸中野窯
- 第22章 網代陶石
- 第23章 伊万里港と平戸藩

第1章 肥前平戸焼を考察するならば

東シナ海、南シナ海、海のシルクロードを作り上げていくネットワーク集団（海人）たちを考えることが大変大事だと私は考えています。どの時代から始めるか、私は蒙古襲来から始めることにしたい。

蒙古襲来によって、海人たちは大陸へのルートやネットワーク構築の可能性を知りました。そのような時代のなかで「倭寇が誕生します」、折しも西洋では、大航海時代が始まります。

西海の霸者「松浦党」が誕生します。松浦党は倭寇のネットワーク集団で、大きくなるにつれて、上松浦党と下松浦党に分かれます。日本は戦国時代に入り、上松浦党は、波多一族が藩となるはずでしたが、太閤豊臣秀吉により改易となります。下松浦党は、平戸藩として江戸時代まで生き抜きました。

松浦党は、西海の果てで貧しい人々が寄り添い、細々と生き抜いてきた「海人」たちです。転機が訪れたのは、大陸との民間交流、貿易、密貿易、海賊行為等の「海人」が活躍できる、大航海時代が始まったからです。

そういう時代の流れのなかで「平戸焼、肥前の磁器、の誕生」があります。海人たちの交流のなかでも、特に「中国大陆との交流」が、新時代を作り上げたと思っています。

国際貿易都市「堺」が日本の窓口として活躍するのは、日明貿易が始まり遣明船が、堺港に着岸した1469年から始まります。多くの中国人やポルトガル人、イエズス会宣教師らが、堺を目指しました。なかでも中国人が圧倒的に多く、彼らは100年後には堺の住人となって、中国（海人）との交易をより強く発展させました。1568年織田信長が、堺の自治権を取り上げたため、堺は海外貿易港としての機能が衰退していくことになります。

後期倭寇の霸王王直が誕生しますが、いきなり誕生するわけではありません。明朝の「海禁」により海外貿易が出来なくなった商人

たちが、密貿易に活路を見出し、海賊行為も厭わない覚悟で明朝に刃向かいました。

最初のうちは、小さな集団がたくさん出来て、下剋上を繰り返し、頂点に上りつめたのが「王直」です。王直と平戸藩が出会うのは、1540年に平戸藩が懇願し王直がそれに応じる形で、土産には火縄銃を持参しました。1542年に王直は大邸宅を平戸に建てました。1543年には種子島で難破し、そこで火縄銃を披露しましたが、それは堺港との貿易が目的でした。1550年、ポルトガル船が平戸に入港すると、王直はますます力を増していき、東シナ海、南シナ海の霸者となります。1559年明の官憲の謀略により処刑されました。

平戸藩は、王直の力を借りて下松浦党の霸者となり、「平戸松浦」は後の「平戸藩」となります。

第2章 平戸三川内焼を研究する方向性について

肥前地区、西海地区、松浦地区、五島列島、壱岐、対馬、東シナ海、南シナ海、日本海等の海の文化圏としての捉え方から始めるべきではないかと思います。

太古から海の交流はあったが、私は平戸藩の成立する要因である元寇の襲来、倭寇の誕生から始めたいと思います。ヨーロッパでは

「大航海時代」が始まり、海のシルクロードが出来上がり、海の霸権争いが始まり、日本は明治維新に突入します。

後期倭寇には「海の王」としての主張が感じられます。平戸藩は、そのような時代を明治維新まで生き抜いた藩です。海の民を束ね、後期倭寇と共に海に活路を見い出し、西の都と呼ばれる繁栄を勝ち取った藩です。

景德鎮が磁器生産地の王として約800年君臨します。この期間、中国・ベトナム以外では磁器を作ることが出来ませんでした。それは何故でしょうか？そのような磁器を約800年後「平戸中野窯」が誕生させました。なぜ平戸藩が磁器の生産を研究開発したのか考えて欲しいと思います。

この時代、国内では関ヶ原合戦があり徳川幕府が武士文化を誕生、完成させていきます。平戸藩と徳川幕府との関係はどのようなものであったか考える必要があります。

「平戸三川内焼」生産の目的は、その時々の情勢によって変わるものと思われますが、そういう見方をしてみる必要があると思います。今では磁器の誕生には、中国人の知識と技術が必要だと主張する研究者はいますが、研究対象として扱うまでに至りません。

（この時代は平戸藩しか中国とのパイプはありませんでした。）

磁器を作る側から考察すると、秀吉の朝鮮出兵で連れて来られた陶工たちが本当に磁器の器を肥前で作る必要があったのか疑問が残ります。当時は唐津焼で充分であったはずです。

肥前地区で陶工として連れて来られた者のなかで、名前がはっき

りしている人物は、平戸に上陸した巨関だけです。今村文書は学問的に取り上げられていませんが、当時の状況については嘘を書く必要があったり、または真実を語ることが出来なかつたものと考えて、想像力を働かせて紐解く必要があると思われます。

平戸藩から中野窯製作資金を調達することが出来たのは何故だったのか、中野窯では何を焼いていたのか、陶工たちはどこに住んでいたのか、材料はどこから調達していたのか、謎が多いまま研究対象とされぬままでいる平戸中野窯について、磁器誕生を研究する研究者はもっと着目すべきだと思います。

三川内山移動についても、なぜ移動することになったのかを研究する研究者が誰もいません。椎野峰より新しいメンバーも参加していることは注目すべき点であります。この移動は、1625～1650年まで約25年の時間をかけて慎重に策をめぐらし用意周到に進められました。李朝磁器は肥前より朝鮮に帰った陶工たちが作った可能性も否定できません。肥前地区の磁器生産地である三川内山、有田、波佐見は10キロ圏内にあります。三川内山には新窯と呼ばれている窯がありますが、これは日本で初の本格的磁器窯（徳化窯）であると思われます。

中野窯では30年間のうちに人口は150人から200人に増加していたと思われます。その人々は全員が三川内山へ移動したのでしょうか？その全員が今村姓だったのでしょうか？平戸中野窯は発掘調査されていますが、1600年説と1630年説があり、結論にはまだ至っておりません。李参平が磁器を初めて焼成したという明治20年に有田が作り上げた有田説に誰もが呪縛のように洗脳されてしまって、真実を探究することが出来なくなっているように思われます。

巨関こそが肥前の陶祖であるはずです。巨関は普通の陶工ではありませんでした。韓国には彼が関与した窯場があり、巨関はその窯場と平戸中野を行き来していた形跡があります。巨関は平戸に来て仲間たちの生活基盤を整えた後、椎野峰に入りました。有田では高

原五郎七と名乗っていました。彼は行く先々で名前を変えていました。巨闘が何を考えてどのような行動をしていたのかを解き明かすることは、肥前地区の磁器発祥のメカニズムを解明する上で重要な事項であると思います。

鄭成功、中野窯、平戸藩、伊万里焼、鍋島藩には壮大な肥前磁器物語があります。これらには徳川幕府も関係していました。平戸藩は、密貿易を1640年頃まで続けていました。徳川幕府は海外貿易を平戸から長崎出島へ移しました。田川まつが鎖国を犯し中国で憤死し、また鄭成功も死にました。その結果ジャンク船の力は弱まりましたが、徳川幕府は島津藩の海外貿易を取り上げることはできませんでした。

イギリスが南シナ海から東シナ海へと入り清国と対峙しました。アヘン戦争を経て、徳川幕府の鎖国政策も崩壊していきました。明治時代に入ると、明治政府、佐賀県、有田による万国博覧会出品用に仕立て上げた、朝鮮人陶工李參平による磁器発祥説が宣伝されるようになり、肥前磁器の真実を探求する妨げになるようになります。

平戸三川内焼は、そのような環境のなかでも生き続けてきました。平戸中野窯は1600年には磁器の生産に成功しています。中野窯は研究目的の窯でしたが、中野窯で焼いた磁器は中国産として国内で売り捌かれました。材料はほとんどが密貿易で調達されており、中国産、韓国産、国内産の原料によって生産されていました。1620年頃には、品質面、量産面、資金調達面で目処が立ちましたが、徳川幕府との軋轢があって、平戸三川内焼はその存亡そのものを考え直す必要に迫られました。

三川内山への移動、茶道鎮信流の誕生、長葉窯の誕生、肥前磁器同胞の村づくりなど、平戸藩は生き抜くためにあらゆることをして最善を尽くしました。その結果、その対価は大きなものでしたが、平戸藩は生き抜くことに成功しました。松浦党として徳川時代を唯一生き抜いた藩です。

海の霸権争いを考えると、後期倭寇と西欧列強（ポルトガル・スペイン・オランダ・イギリス）、イエズス会が入り混じった混沌とした社会情勢があるなかで、国内では戦国時代を経て、武家政権（豊臣秀吉、徳川政権）へと目まぐるしく変化していく、そのような環境のなかで「平戸三川内焼」は誕生したのです。

第3章 大航海時代の中国海人と西海海人

この時代の中国と日本との関わりについて研究がされていません。特に海人たち、前期倭寇、後期倭寇といわれた海の霸者たちについての研究が全くされておりません。

ここでは平戸焼から始まる有田焼、波佐見焼の関わりについて考察したいと思います。中国との交流は、卑弥呼の時代以前からありました。前期倭寇が誕生するのは、元寇があり肥前地区が壊滅的な打撃を受けた頃になります。時の中央政権（鎌倉幕府）は何もしませんでした。そのような厳しい時代環境のなかで、前期倭寇の誕生は必然的なものでした。はじめは小さな集団から始まり、それが大きくなって松浦党が誕生し、やがて上松浦党（波多氏）と下松浦党（平戸松浦）に分かれました。戦国時代に入ると、海人たちは陸の戦いを強いられるようになりました。

波多氏と平戸藩は貿易が財政上重要であると考え、多少の小競り合いはありました。波多氏は朝鮮との貿易をして、平戸松浦は中国との貿易をすることで住み分けをしていました。

後期倭寇は明の海禁政策により自然発的に生まれて、小さな集団がやがて大きくなり海の霸者として君臨するようになりました。
(海人ネットワークは、中国人・朝鮮人・日本人が入り乱れる形で成立していました。)

平戸松浦は、後期倭寇の霸王である王直との密貿易を望んで、平戸城内に大きな屋敷を建て歓待しました。王直を得た平戸松浦は、ポルトガルとの貿易も可能となり、戦国大名として名乗りを上げることができました。しかし王直は明の謀略により命を落すこととなり、平戸松浦との盟友関係は17年間で終わりました。王直の後を引き継いだのは、李旦でした。平戸藩は密貿易で得た中国磁器を国内向けに販売していました。上松浦党の波多氏は、岸岳五窯にて陶器を作りそれを朝鮮産として国内販売して莫大な利益を上げていました。平戸藩は李旦を使って領内の中野で磁器生産を開始しました。

た。中国人陶工たちが生産した平戸焼は、中国産として国内販売されて利益を上げていました。しかしそのような時代は長くは続かず、豊臣秀吉、徳川家康の天下統一によって戦国時代は終わりを迎えました。平戸藩は激動の時代のなかを生き抜くためにあらゆる対応をしてきました。中野窯においては、中国人陶工たちを朝鮮人陶工と称して、秀吉の朝鮮出兵の際に連れ帰るという対応をしました。

関ヶ原合戦では、鎮信（法印）は陰陽の策を用いて難を逃れましたが、その2年後には息子（久信）は伏見で死にました。それでも幕府は、外様大名として平戸藩を警戒しました。密貿易、平戸中野窯、キリストン禁止令、オランダ船平戸入港、さまざまな問題について全力で対応してきました。それでもまだ安心できずに、鎮信（法印）は日の岳城を焼くことで幕府への恭順を示しました。

1622年最後の霸王である鄭芝龍が平戸に入港しました。平戸隆信（宗陽）は、李旦を高く評価できずに不満だったので、鄭一族との協議は望むところでした。海人たちのネットワーク世界において、鄭芝龍という若きリーダーに未来を賭けたと言えます。上陸後の芝龍の活躍はめざましく、わずか2年で李旦に代わる頭目の座に就きました。平戸隆信（宗陽）は、あっぱれと大いに喜び、彼に「平戸老一官」の名を授けました。

鄭芝龍は、1627年に中国沿岸で大規模な略奪行為を行ないました。このため、明朝はオランダに海賊を排除する協力を要請しました。オランダはこれに協力しましたが、鄭芝龍軍に敗れ去りました。芝龍の軍事力と経済力が強大なことを知った明は、方針を転換し、1628年に彼を福建省の沿岸防衛提督に任じました。その後平戸藩はすぐに幕府に鄭芝龍を謁見させました。

タイオワン事件（1624～31年）が起き、日蘭関係は悪化していきました。事件は解決の方向へ進んでいましたが、将軍秀忠が死亡すると長期化するおそれがありました。このためオランダ側は、早期解決を願い、新将軍家光や幕府高官に働きかけて貿易の再開にこぎつけることが出来ました。

1630年に鄭成功は父親の勧めで明の福建省に赴きました。鄭芝龍は1636年に福建省の都督に任命されました。1645年には国王より国内第二位の称号を与えられ、広東から南京に至る一帯を与えられました。

タイオワン事件から、台湾の周りには海賊が次々と出没するようになり、日蘭関係は悪化し、鄭芝龍との関係も不安定なものとなりました。芝龍は、海賊たちを次々に取り締まり、オランダをも恭順させました。

芝龍は、中国から陶磁器を入手できなくなることを予想していました。芝龍にとって陶磁器は、清朝と戦い抜くためには大事な貿易品であると考えていました。（1630年ごろ）。そこで芝龍は平戸藩側に打開策を求める動きをしました。一方の隆信（宗陽）も、中野窯の研究により量産計画の可能性を探っていました。両者はたちまち問題解決のために動き始めることになりました。芝龍が求めていた生産量は膨大であったため、平戸一国では対応できず、隣藩の有田地区、波佐見地区、そして三川内山地区（平戸藩は三川内山への移動を計画していました）が、必要であると考えました。

窯職人、積出港、資金など様々な問題が生じましたが、問題解決に向けて動きました。一番大事な交渉は、幕府への陳情と計画立案の説明、隣藩との交渉へのお願いでした。幕府側に全ての解決について委ねると、幕府側も平戸藩の恭順を認めて、鄭芝龍の要望に応えることとなりました。その結果、中国人陶工たちは朝鮮人陶工として各地に送り込まれ、資金面・生産面など全ての問題については鄭芝龍が責任を持ち、肥前における生産責任は平戸藩が持つことになりました。何か問題が起きた場合には、幕府と協議し沙汰を待つ形になりました。

1640年頃には、各地で陶磁器の生産が始まりました。この恩恵を一番受けたのは鄭成功でした。近年の有田地区での発掘調査で、磁器窯の作り方が中国の徳化用窯と同じであったことが分かりました。

軍資金としての磁器物は、結果として広く世界に肥前磁器を運ぶこととなりました。オランダが制海権を持つ南シナ海を超えれば、イギリス、スペイン、イスラム等の人々によって直接取引されていました。海の考古学の進展により、鄭一族による肥前磁器物の独占販売の実態が明らかになりつつあります。

鄭一族が日本にもたらした最大の功績は、「黄檗文化、隱元禪師」を中心とした「明朝文化の継承」であると私は思います。特に平戸藩・平戸焼は、国のある方、武士の進むべき道、平戸焼が継承しなければならない文化に影響を及ぼすこととなりました。

第4章 鄭成功と平戸焼

【鄭芝龍】

1624年、李旦の後を引き継ぎ倭寇の頭目となつたのが、鄭成功の父である鄭芝龍でした。鄭芝龍は、1581年に中国福建省泉州に生まれ、父親は周辺を支配していた鄭一族の長でした。倭寇の頭目となれたのは、有力な鄭一族の地盤があったからでした。その後、鄭芝龍はオランダ船に乗って平戸内浦に上陸しました。その目的は、王直と同様に密貿易を支配し頭目になるためでした。鄭芝龍は平戸藩主の「鎮信」に取り入るための努力を続け、ついに「平戸一官」の名を戴くことができました。その努力の一つとして挙げられるのが、田川マツとの婚約です。「鎮信」とマツの父「田川七左衛門」は、朝鮮での戦友であり深い関係にありました。

芝龍は平戸藩主「鎮信」から特別待遇を受けるようになり、王直でさえも手に入らなかった「平戸老一官」の称号を得ることとなり、平戸藩にとっても特別な人物となりました。やがて芝龍は、川内浦の医者である田川氏の娘「マツ」を娶り、二人の子を授かりました。

(福松=鄭成功、弟次郎=二代目田川七左衛門)

その後、芝龍は中国に戻り、その手腕が認められ明朝の大將軍に任命されました。だが清朝の勢力が拡大し、一族の将来を危惧した芝龍は清朝に降伏しましたが、謀反の罪に問われて幽閉の身となり、1661年に北京で処刑されました。

鄭成功の母である田川マツは医者である田川七左衛門の娘として平戸で生まれ育ち、貿易を目的に上陸した鄭芝龍と出会い、1624年に福松(鄭成功)を産みました。翌年、頭目李旦が死に、鄭芝龍が頭目の座に就きました。マツは頭目の妻として、一党を束ねることとなりました。

1640年頃には貿易の利権は徳川幕府に奪われ、長崎に貿易の拠点が移りました。幕府は出島を造り、オランダと華僑のみに貿易を許しました。田川マツは華僑の担当頭として、長崎の港でも陣頭

指揮をとっていました。

やがて「マツ」は鎖国のなか、帰国できないことを知りながらも、中国泉州に渡りますが、暫くして清の攻撃による泉州城陥落に際して鄭芝龍は降伏しましたが、城内にいた「マツ」は降伏することなく応戦して泉州城内で自害して、日本女性の心意気を世に示しました。

鄭成功には弟がおり、田川姓を残すために平戸にとどまり、田川次郎左衛門（平戸藩士）として田川姓を受け継いでいきました。父の死後、彼は父の名を継ぎ、二代目田川七左衛門と名乗りました。

【鄭成功】

鄭芝龍と平戸武士の娘マツとの間に生まれた福松（鄭成功）は、平戸で生まれ育ち、7歳の頃に父親の招きで中国へ赴き、学問に励みました。21歳のとき、明の隆武帝より明王朝の国姓「朱成功」を賜りましたが、恐れ多いこととして名だけを「成功」と改めました。以後、人々は彼のことを「国姓爺」と呼ぶようになりました。その後の鄭成功的活躍は述べるまでもないですが、私が思う鄭成功的重要な功績は、①清朝を滅ぼし、明を復活させようとしたこと、②台湾をオランダ人から解放したこと、③肥前磁器を生産販売したことだと考えます。

父の芝龍が清朝に降伏したのに、母のマツは降伏を潔しとせずに憤死しました。支援を求めた徳川幕府も動こうとせず、清軍の攻撃による大敗もありましたが、最終的にはオランダ人が支配する安平のゼーランディア城を陥落させ、オランダ人を台湾から追放しました。鄭成功的活躍は、近松門左衛門の戯曲「国姓爺合戦」にその記述があり、日本でも広く知られ、台湾においては「台湾解放の父」として尊敬を受けています。平戸が輩出した国際的風雲児で英雄といえます。しかし、鄭成功は、オランダ人を台湾から追放した翌年に病に倒れ、39歳で急死しました。

平戸焼は1600年に誕生しました。最初の30年間は景德鎮産

として国内で販売していましたが、鄭芝龍と平戸藩の思惑が一致して、量産化することを決定しました。平戸藩は巨闘に命じて、量産場所を肥前地区と定めました。鄭芝龍は磁器職人を大量に集めて平戸入城を果たし、肥前地区の窯場の指導にあたらせました。1640～1690年頃まで量産し、鄭成功の軍資金の調達源としての役割を果たしました。もし、鄭成功が海の霸王にならなかったら、日本の磁器生産はもっと遅れることとなり、花を咲かせることはできなかっただと思います。

【まとめ】

かつては日本も戦国時代の乱世でしたが、江戸時代になると規律と共に武士道を重んじるようになってきました。鄭成功が生まれたのは、ちょうどそのような時代でした。多くを語らず自己主張もない凛とした姿の母（田川マツ）の日本的なアイデンティティーを鄭成功も受け継いでいました。

父の鄭芝龍が清に降伏したときも、それを潔しとしなかった母の意思にも同調して、同族の反対勢力とも戦って義を貫きました。これは日本の主君に忠実な武士道の精神であり、一度忠誠を誓った明朝に対して決して裏切ることはできませんでした。

南京攻めでは敗れはしましたが、略奪はせず弱者には手を出しませんでした。その進軍の姿は、今でも語り継がれています。台湾を攻めるときにも現地人を大切に扱い、結果的にはオランダの植民地支配から民衆を解放することとなりました。彼は今でも国の英雄として祀られています。

平戸との関係は、後期倭寇の頭目「王直」が東シナ海を牛耳っていた時代から、「李旦」「鄭芝龍」そして「鄭成功」へと受け継がれ、陶磁器の貿易という密接な関係のなかで、大海原を舞台に諸国と交流する鄭一族の精神と日本的な精神を併せ持つ「鄭成功」は、武士道や侘び寂びという日本的な思考を哲学として持ち行動してい

たのではないかと私は思います。日本における鄭成功についての研究がさらに進展することを願うばかりです。

第5章 平戸焼誕生を考える

平戸藩が、いつごろ磁器物を作ろうと決定したのかを考察しようと思います。

上松浦党波多氏は、（1550年頃不明）朝鮮陶工を使い岸岳五窯にて、唐津焼（朝鮮産）として生産販売して莫大な利益を上げていましたが、豊臣秀吉に改易させられました。（1594年）

平戸藩は、後期倭寇の霸王王直と貿易を始め、（1540年）平戸城内に御殿を建てて王直を歓待しました。（1557年）王直は明で捕えられ処刑されました。王直のあとは李旦が後を継ぎました。

陶工巨関は、中国人であると私は考えています。（朝鮮陶工で平戸入場は40歳と文献にはあります）（1594年）

戦国時代の平戸藩は、財政政策のために磁器物を生産販売することが必要と考えました。時代は李旦のときであって、波多氏が改易される前のことであり、陶工巨関が20歳代であったと私は考えます。（1575～85年）

出来上がった品物は、中国産として国内販売されました。中国人の手で磁器窯を作り、材料も中国より入手して生産していました。

平戸藩最初の磁器窯は、平戸中野窯とされています。発掘調査されていますが、調査結果としての報告は、曖昧な表現で終わっています。せめて、年代や、何を焼いていたのか、窯は中国のどこの窯と同じ作りをしていたのかを発表すべきです。

第6章 平戸藩窯の遍歴と年代順

平戸中野窯（1585～1640）

- ・中国景德鎮磁器を手本に磁器の生産を研究した窯
- ・中国陶工巨闘を中心に研究生産された窯（生産された磁器は中国産として販売した）
- ・中国人職人の力を借りて窯作りした（窯は中国の技術で作られた）
- ・発掘調査はされているが、1600年説と1630年説があり、何を焼いていたのか分からず、よく解説されていない窯
- ・窯は整理されて壊されていた（廃窯は自然放棄が通常の時代）
- ・物原には、窯道具とサヤ鉢が出てきたが、製品は出てこなかった。
- ・徳川幕府との軋轢があり秘密保持の必要があった。
- ・1620年代になると磁器生産の目処もついて、窯人口も増加していく。問題解決へ取り組む必要が出てきた。
- ・「通説」唐津焼と同じような陶器とヒビ焼が生産されていたとされる。

三川内山移動と長葉窯（1625～1645年）

- ・移動する条件と目的が整った。肥前磁器同胞の村作り、景德鎮を凌駕する製品作りと徳川幕府との軋轢がなくなりつつあり、磁器生産の障害がなくなったが、平戸藩は改易の恐れを考慮して慎重に行動した。
- ・まず三川内山入口付近に長葉窯をつくり、幕府側から問われても肥前地区によくある窯で磁器窯ではないと主張した。
- ・中里エイ（巨闘の縁者）の息子である茂右衛門が入り、椎野峰より仲間を集め村作りに邁進した。
- ・1630年平戸藩は、長葉窯を藩窯に指定した。土窯を指定したのは何故なのか不明である。磁器物を試し焼きしたのかも知れない。

- ・平戸中野窯から移動が始まる。1630～1650年をかけて移動した。新窯と呼ばれる、肥前地区最初の磁器窯を作り上げて、みんなの町づくりをした。
- ・発掘調査はされたが、中野窯と同じく未解明のことが多い窯

新窯（誰にも研究されない肥前の聖なる磁器窯）

- ・1630年頃、平戸中野窯より移動してきた。今村氏を中心に本格的磁器窯作りをした。（中野からの移動者は全員今村氏）
- ・この窯は販売するための器は作られてない。景德鎮より学び景德鎮を凌駕する芸術品を作る使命をもった窯だった。

東窯、西窯（三川内山奥、1650年～）

- ・村がまとまって助け合い100以上の連房窯で磁器生産を行なった。これだけの生産は藩窯としては多いが未解明である。

第7章 平戸中野窯（不明～1640年）

中国人巨関たちが、平戸藩の奨励に応じて中野窯に入りましたが、そこにはいろいろな疑問が発生します。平戸藩は、「いつ磁器物を作ろうと考えたのか」「誰が中国人を連れてきたのか」「なぜ中野に窯を作ろうと考えたのか」、それらの計画発案、実行運営、責任者は誰だったのかを解き明かす必要があります。

中野窯に入った巨関たちは、先ず磁器窯作りに取り掛かりました。巨関はどんな磁器窯を目指すのか、目的について平戸藩と話し合いました。

平戸藩としては、「景德鎮の製品を目指すこと」「明の焼き物として国内販売すること」を希望し、巨関は、同胞の安全と生活の保証、同胞の村作りを希望しました。

まずは景德鎮と同じく、中国から材料、道具等を取り寄せて研究開発に力を注ぎました。完成した製品は景德鎮として国内で販売し、問題が発生すると改善研究に取り組み、国内材料だけで、景德鎮を凌駕する製品作りに邁進しました。

巨関は、1610年頃から肥前地区の陶石探しに行きました。まずは、朝鮮人陶工たちの住む唐津椎野峰を訪ね、前田徳左衛門、中里茂右衛門らと協議し、肥前地区の活動拠点、情報収集の基地と定めました。

巨関は安全な有田川を遡って黒牟田、三川内、波佐見、嬉野、武雄を回ってサンプルを持ち帰り、中野窯で試し焼をして「有田泉陶石、波佐見三俣陶石、天草陶石、針尾網代陶石」の混合粘土に注目し、実用研究開発をしました。

1620年頃には磁器生産の量産化に目処がつき、景德鎮を凌駕することもでき、平戸中野窯の目的は達成され、次の目標に向かって計画立案を推し進めることになりました。

1600～1640年、平戸藩が直面する大問題は、徳川幕府とのその存亡をかけた外様大名としての交渉戦争時代でした。このよ

うな時代背景だったので、中野窯から三川内山への窯移動は慎重に計画されて行われることとなりました。

第8章 平戸藩長葉山窯

平戸藩は、磁器生産の拡大を狙い（1620年頃）平戸領折尾瀬、三川内山に生産拠点を移す決定をしました。幕府側との軋轢があり、細心の注意を払って三川内山の手前にダミー窯として長葉山窯を作りました。

この窯の持つ使命は2つありました。それは、幕府に発見されることと、規模拡大のために新しい仲間を集めることでした。幕府側は、波多石崩れの陶工たちが唐津焼を作り生活している窯で、肥前地区にはよくある窯であると認識しました。

1625年、最初に中里エイ親子を中心とした数名から始まり、1640年には椎野峰からの仲間たちも加わり数百人規模になっていました。

平戸中野窯から三川内山への移動は、20年間（1630～1650年）をかけた大移動となりました。まずは肥前地区における本格的磁器窯製作（数年をかけての事業）、分業体制確立と統率の研究開発を実践しながら進める必要がありました。一方で、平戸中野窯でもギリギリまで生産する必要もありました。

平戸藩では、幕府をも巻き込む大問題が発生しました。鄭一族の鄭芝龍が平戸に入場したのです。1622年に平戸入場した鄭芝龍は、2年後には後期倭寇最後の霸王になり、平戸藩主より「平戸老一官」の称号を授かりました。鄭成功の母、田川マツを娶り、東シナ海、南シナ海の霸者となり、明國の大將軍となりました。

平戸焼の進む方向性が、この鄭芝龍の出現によって大きく変わることとなりました。芝龍は、景德鎮からの磁器物の入手が困難となり、貿易の主流であった磁器物の調達問題を解決する必要に迫られました。平戸藩としても、この問題が解決できれば、藩の繁栄が確実視できましたが、幕府や隣藩との交渉は難航することが予測されました。

肥前地区では、量産計画に変更する必要が生じていました。有田

地区、波佐見地区においても、量産計画に取り組もうとしていました。特に有田地区では泉陶石があったので、量産できる場所として有望であると考えられました。平戸藩としては、幕府への恭順と説明に重きを置いていたので、幕府の御沙汰に希望を託しました。

第9章 平戸藩新窯（1630年～明治）

新窯と称されている窯であるが、何が新なのかが分からぬ三川内山に存在した窯です。この窯は、肥前地区に最初に作られた本格的な磁器窯で「今村家だけが製作できた聖なる新式の窯であった」と私は考えています。

現在は宅地が立ち並び、窯の存在はありませんが、大雨による崖崩れが生じて、物原の一部が流れ出ました。この窯は、古い窯の上に新しい窯を作った窯でした。

平戸中野から三川内山へ移動するために作られましたが、同時に肥前磁器窯の本格的作製のために作られた窯でした。

当時の時代背景は複雑に錯綜する時代でしたので、幕府、平戸藩、鄭一族、のちには隣藩をも取り込む肥前窯業開発地区となりました。こうして、三川内山は磁器物制作のための「肥前における発信基地」となりました。肥前地区の窯場は、三川内山、有田南川原、波佐見三俣という10キロ圏内において始まることとなりました。

第10章 三川内山、東窯、西窯

1640年東窯の製作に着手され、長葉山窯から移動し待望の磁器窯が整備されることとなりました。西窯も同様に整備され、東窯・西窯は、100m以上の連房窯でした。

これによって鄭一族の要望に応えることができましたが、1680年代になると、台湾の鄭一族が清国に敗れ、肥前の磁器はその販売先を失うこととなりました。東窯・西窯は、鄭一族のために作られたものであったが故に、鄭一族の滅亡とともにその存立の基盤を失いました。

鍋島藩、大村藩は国内向け販売に力を入れて危機を乗り越えましたが、平戸藩は国内販売の道は取れず、幕府の沙汰のため藩窯としての道を選ぶことになりました。東窯・西窯は、生産量が不足する状態で運営されることとなり、不況期と繁栄期を繰り返しました。しかし、東窯・西窯は、肥前地区における技術的な先駆者として高い芸術性と美術性を有しており、武士道、平戸鎮信流茶道とともに発展することになりました。

1806年大不況のため、民間人として長崎出島前で直接販売を試みましたが、結果は上々でした。しかし長崎奉行から、平戸藩に御沙汰があり、民間では無理であると判断した平戸藩は、平戸三川内焼物産会所を設置しました。

第11章 肥前の分業体制下

分業化を進める理由は、鄭一族の要望を平戸藩が叶えるためでした。巨関たちは平戸中野窯の研究で、量産などの目処はついていましたが、鄭一族の要望に応えるには程遠い計画でしたので、計画を再考して、肥前地区に広げる必要が出てきました。また、当時は半農半業の時代ですから働き方改革も必要でした。

隣藩との協議も必要で、鄭芝龍、平戸藩、幕府との協議の成功も、必須条件となりましたが、奇跡的に幕府側が内々に協力する形で隣藩問題も解決できました。当時は、大坂夏の陣も終わり、天草四郎を代表とするキリストンとの戦いもあり、幕府は浪人問題に苦慮していた時代背景がありました。

肥前地区（三川内山、有田南川原、波佐見三俣）は、一山100人くらいの規模で、三皿山は相互に協力を惜しまず、何か問題が生じたときには三川内山で問題解決を図りました。中国における分業は最大で47区分にも分けられたそうですが、肥前地区では分業は7区分から始まりました。

1630年（平戸藩、鄭芝龍、徳川幕府）になると、幕府側も了承し、隣藩へは幕府から御沙汰が内々に出ることになりました。どういう理由かは分かりませんが、幕府は朝鮮人による磁器誕生を内々に沙汰しました。

分業製作、磁器窯製作、量産製作、製品製作などを考えると、中国人でなければ肥前磁器誕生は成し得なかっただと思います。朝鮮人陶工たちは労働力としては必要不可欠な存在であったとは思います。

1633年、平戸藩、三之丞を中心とした、肥前地区における制作集団が出来ました。巨関は、量産の要である有田地区に入り陣頭指揮をしました。

どれほどの中人が肥前地区に入ってきたのかは解りませんが、現在中国側との共同研究に入っています。分業のリーダーとしての

中国人職人の数は、中野窯を含めて、当初は60～100名ほどは必要であったと私は考えます。さらに最盛期の1630～1660年の30年の間には、には数百人規模で肥前地区に入って来ていて、その後は中国へ帰った者と帰化して残った者に分かれました。

第12章 王直について

中国、明の海寇の首領、密貿易業者。安徽省の出身。号は五峰。任侠で知略があり、仲間の徐惟学・葉宗滿らと海船を造り海禁を犯して海上貿易に進出し、南海諸国と交易して巨富を築きました。ついで、1545年日本の五島を根拠として日中密貿易の仲買として重きをなし、淨海王と自称しました。1547年浙江巡撫朱執の海禁強化と取り締まりが厳しくなり、逃れて五島・平戸に拠って徽王と号して倭寇を指揮し、中国の沿海地を荒らし回りました。これに苦しんだ明朝は、征倭總督胡宗憲の謀略で、1557年王直を誘い出すことに成功し、王直は捕えられ処刑されました。以上が日本における王直の一般的な評価です。

王直については中国側も認識しています。どのように認識しているかというと、中国側から見ると、悪事を働いた海賊の親玉だと認識することが主流です。しかし中国の学者のなかには違う意見を言う人もいます。それは王直が海の情報網を網羅して、非常に世界的に貢献した人物であり、西洋の大航海時代の遙か前に王直が東シナ海・南シナ海を統一しており、これは王直のすごい功績であると評価する学者もいますが、圧倒的大多数は王直は悪い罪人であるという評価で一蹴されます。

しかし私は、平戸にとって王直がいなければ平戸藩は存在すらしなかったかも知れないほど重要な人物であると考えます。平戸藩の磁器生産においては、王直と巨闘の関係が重要になります。この点は、平戸藩がいつ自分の藩で磁器を制作しようと思ったかが重要なポイントで、その磁器生産の情報を誰から得たのかということも大事なポイントです。

そこで登場するのが王直であり、王直の手引きによって巨闘と平戸藩が対面する場面があったのかも知れません。それも通説の1598年ではなく、もっと前の段階で会っていると私は考えています。王直は1560年1月に明に捕えられて処刑されています。ですか

ら平戸藩と巨関を繋いだのは王直の後を継いだ李旦かも知れません。しかし李旦は密貿易の相手方として交渉の場に出るタイプではありません。

ただ、王直と将来についての方向性を話し合った可能性はあります。平戸藩主松浦鎮信の父、松浦隆信は戦国乱世に領土を広げ、平戸藩の礎を築いた人物でしたが、1542年に王直を平戸に招き入れて王直の館まで建造しています。それは鉄砲などの武器を手に入れるためであったようですが、その時期に焼き物に関する話はされていた可能性はあります。

隆信も最初は大変でした。大内氏に助けを求めたりする場面もありました。そのような時期に奇跡的に王直が現れます。王直が現れてからの隆信は、勝ち続けて領土を広げていきます。なぜ強くなれたのか、それは資金力でした。それに鉄砲が手に入ったことも大きかったです。

そのうち平戸でも鉄砲を作り始めるようになりました。その鉄砲鍛冶と言われる人は中国人だった可能性があります。中国から堺に来た人物に田川七左衛門がいます。日本側は今も認めていませんが、田川七左衛門は鉄の職人で、堺に行ったということを中国側の資料では証明されています。私は朝鮮出兵の大将であった小西行長も中国人であったのではないかと思っています。

とにかく、王直が現れてからの平戸は負けなしという事実は、誰がどの資料を調べても疑う余地がありません。王直は、平戸藩を作った1人であると思います。

ところが学者の平戸藩に対する評価というものは大内の言いなりの平戸藩であって、西の都とは言うけれど、実際は大内に操られていただけだったと今日の日本の学者は評価しています。

しかし私はそれは全く違うと思います。大内氏を利用していただけで戦国時代はこのようなことは当たり前にあることで、力をつけて独立して平戸藩として成り立っていたのであり、そこには王直の存在が大きかったのだと思います。王直の存在は大内氏も怖かった

のであって、王直がいなかったら平戸藩は潰されていたと思います。

王直自身は東シナ海・南シナ海で海の王として君臨したかったのだと思います。当時はポルトガルとスペインの脅威がありました。しかし王直にはそれら西洋列強に勝つだけの力を身につけていました。

私が中国側に見直して欲しいことは、ポルトガルとスペインのような艦隊に立ち向かったのは王直だけであり、ただの海賊と評価するのではなく、王直に対して歴史的に適切な評価をして欲しいと思っています。東シナ海・南シナ海での力関係は、ヨーロッパよりも王直のほうが上であったし、王直の手引きがなければ彼らはこの地域の航路を利用することもできませんでした。

イエズス会であっても王直は無視できる存在ではありませんでした。王直もイエズス会は大事にしていましたから、王直自身もキリストンに入っていました。そのあたりのバランス感覚が優れていて、王直は戦わずして利益を上げるような交渉をヨーロッパ側としていたということです。

ヨーロッパ側の戦略は、城を築いて自分の領土として支配するという植民地化の手法でしたが、東シナ海・南シナ海においてはその手法がとれませんでした。

当時は明の終焉が近い時代でしたが、まだ力はあった時代ですから、明国としては海禁令に反して沿岸地を荒らしまわった王直のことを罪人として成敗する歴史を作ったのでしょう。しかし王直の功績というものは、中国人も本当は理解しているのだと思います。王直は捕えられ調べられて処刑されましたから、資料は多く残っているはずなので、そのなかで、平戸との関わりとか日本側では全く分かっていないことなどが解明されるようになれば、素晴らしいことだと思います。

第13章 鉄砲伝来について

日本では平戸は王直を1542年に招き入れたとなっていますが、私はそれは違うと思います。もっと前に土産品として鉄砲を贈っているかも知れません。

日本における鉄砲伝来は「1543年鹿児島の種子島に1隻の中国戦が漂着し、その船に乗っていたポルトガル人によって火縄式鉄砲が伝えられた」ということになっていますが、この中国船の主は誰であろう王直であり、たまたま漂着した種子島で鉄砲を渡したことが鉄砲伝来の年として歴史的に認識されているに過ぎません。

公式な記録でもその1年前の1542年には平戸に招き入れられ中国風のお屋敷を建てています。さらには、その2年前の1540年には五島に来航している記録があるので、その頃から平戸側との関係はあったと考えられます。その間、平戸は隆信の父興信が1541年9月に亡くなり跡を継いだ隆信はまだ12歳でした。ですから実際の交渉は重臣の籠手田氏や大島氏がやっていたのかも知れませんが、平戸が鉄砲に興味を示さなかったわけがありません。現に興信が亡くなった翌年の1542年には、宗家松浦を攻めています。このときに鉄砲を実戦使用した可能性は高いのです。そうなれば、本来の鉄砲伝来の地は平戸であり、少なくとも1542年には平戸に伝来していて、日本で初めての実践での使用となります。

王直が1542年に平戸に招き入れられたときに鉄砲を献上していないかどうかを、私は中国側に調べて欲しいと思っています。このことで日本の常識が見直され、平戸と王直の関係性が及ぼした業績で、中国と日本の関係が見直されこととなれば良いことだと思います。

王直の中国風のお屋敷を建てるにあたって、おそらく中国側から多くの職人が来航していたはずであり、そのまま住み着いた者もいたかも知れません。王直のお屋敷周辺は中華街のようであったとの記録もあります。その時期に焼き物の話も当然出ているでしょうし、

景德鎮の美しい白磁の器も目にしていたはずで、この時代から陶石はどこで見つかるのか、窯はどこに築くべきなのか、用意周到に磁器生産の計画をしていたのかも知れません。

第14章 鄭芝龍について

1500年代、東シナ海は明の「海禁」政策に反した行動に出た中国人商人たちが海外との密貿易を行い、「後期倭寇」となりました。

後期倭寇の初代頭目が「王直」であり、東シナ海と南シナ海を支配下に置いていました。王直亡き後、王直が作った平戸との密貿易システムを引き継いだのは「李旦」でした。李旦の時代になるとそれまで王直が支配していた南シナ海では、ポルトガルなどの西洋列強が支配権を握るようになっていました。日本の平戸や大村にもキリスト教の布教を掲げてさまざまな野心を持って上陸していました。

1600年頃になると、西欧の霸者がポルトガル・スペインからイギリス・オランダへと変わりました。オランダは倭寇との関係も良好で、日本へもたびたびやって来していました。

1622年、鄭成功の父「鄭芝龍」は中国福建省で強大な勢力を誇っていた鄭一族の長の息子として平戸に上陸しました。1624年には川内浦の武士、田川氏の娘「まつ」を娶り2人の子を授かりました。長男福松、後の「鄭成功」。次男は平戸藩士、田川次郎左衛門。

1625年、鄭芝龍は李旦の後に倭寇の頭目となりました。倭寇の頭目となれたのは、鄭一族の地盤があったからこそでした。

鄭芝龍の台頭によって平戸藩は李旦から鄭一族に貿易相手を乗り換えました。鄭芝龍への平戸藩主「隆信（宗陽）」からの待遇は特別で、「平戸老一官」の称号を賜わっています。それだけ平戸藩にとって特別な人物でした。

鄭芝龍は平戸藩主の「隆信（宗陽）」と陶工の頭目「巨闘」と共に海外向けの陶磁器の量産を計画して実行しました。それがのちの肥前陶磁器の発展へと繋がっていきます。

その後、鄭芝龍は中国に戻り、その活発な手腕が認められて明の

大將軍に任命されました。ところが清による勢力の拡大から、一族の将来を危惧した鄭芝龍は清に降伏するも、謀反の罪を問われて幽閉の身となり、1661年に北京で処刑されました。

鄭芝龍は、磁器物が中国より出入できなくなることに危機感を感じ、打開策として肥前地区にて磁器物生産が出来ないかを平戸藩と協議し、幕府への許しをいただき、肥前地区（三川内山、有田南川原、波佐見）にて磁器を生産した最初の人物です。

第15章 鄭成功について

後期倭寇の頭目である鄭芝龍と武士の娘まつとの間に生まれた福松（鄭成功）は、平戸で生まれ育ち、7歳の頃、父の招きで中国に赴き、学びに励みました。21歳のとき、明の隆武帝により明王朝の国姓「朱」を賜ったことから、名を「成功」と改めた。以後、人々は彼を「国姓爺」と呼ぶようになりました。鄭成功の最も重要な功績は、一つには清朝を滅ぼし、民を復活させようと努めたこと、もう一つは台湾からオランダ人を排除しようとしたことでした。

父の芝龍が清朝に降伏したとき、その降伏を潔しとせず母まつが憤死したこと、さらに支援を求める徳川幕府がそれに応じないなどの苦労もあり、清軍攻撃による大敗もあったが、結果的にはオランダ人の守る安平のゼーランディア城を陥落させ、オランダ人を台湾から追放しました。平戸が生んだ国際的風雲児ともいべき英雄でした。しかし、鄭成功はオランダ人を台湾から追放した翌年に、病に倒れ39歳で急死しました。

このように戦いに明け暮れていた鄭成功は、資金が必要であるため、父の代から続く平戸藩との関係を強化して、貿易品としての肥前における磁器物の大量生産を促進しました。また平戸藩側にとつても、鄭一族は古くからの重要な貿易相手であり、鄭成功の代になり、ますます肥前陶磁器の大量生産という互いの利益になる事業を推し進めました。そのときに鄭成功と平戸藩とのパイプ役になった弟の田川次郎左衛門の存在が大いに役立ちました。

鄭芝龍の時代から徐々に中国産の貿易品としての磁器が流通しにくくなっていました。当時日本から輸出していたものは鉱物が主流であり、中国からの磁器の流出が減り、主力の貿易品の一つがなくなったことで貿易商としての鄭一族には死活問題でした。

鄭成功の時代になると、さらに中国からの磁器の流出は無くなり、新たな磁器の生産地が必要になりました。鄭芝龍は、平戸藩と交渉しながら、中国では磁器職人たちを集めしていました。鄭成功の時代

になって本格的に肥前の磁器生産が始まり、三川内・有田・波佐見の地で大量生産が行われるようになりました。それを実行したのは平戸藩で、後期倭寇最後の長である鄭一族との密接な関係があったからです。

かつては日本も戦国時代の乱世でしたが江戸時代になると、規律と共に武士道を重んじるようになりました。鄭成功が生まれたのはそのような時代でした。多くを語らず自己主張もしない凛とした姿の母（田川まつ）の日本的なアイデンティティーを鄭成功は受け継いでいました。

父の鄭芝龍が真に降伏したときも、それを潔しとしなかった母の意思に同調して、芝龍の軍と戦っています。これは日本の主君に忠実な武士道の精神であり、一度忠誠を誓った明朝に対して裏切ることなどできなかったのでした。

南京攻めのときも敗れはしましたが、略奪はせず弱者には手を出しませんでした。その進軍の姿は今でも語り継がれています。

台湾を攻めるときも現地人を大切に扱い、結果的にはオランダの植民地支配から民衆を解放しました。今でも国の英雄として祀られています。

後期倭寇の頭目「王直」が東シナ海を牛耳っていた時代から続いていた平戸との関係は、「李旦」から「鄭芝龍」そして「鄭成功」へと受け継がれ、陶磁器の貿易という関係のなかで、大海原を舞台に諸国と交流する鄭一族の精神と日本的な精神を併せ持つ「鄭成功」は武士道や侘び寂びなどの日本的な考え方を哲学として心に持つて行動していたのではないかと私は思います。

第16章 田川まつについて

田川家は元々戦国大名である小西行長の家臣でした。秀吉の朝鮮出兵で小西行長の隊として出陣していた「田川七左衛門」は同じく小西行長隊として出陣していた平戸の「鎮信」とは戦友でした。その後に起こる関ヶ原の合戦で、敗戦した西軍側の小西行長の家臣であった田川七左衛門は窮地に立たされたが、鎮信によって平戸にかくまわれて、武士としての肩書きを隠し医者として平戸で暮らすことになりました。鄭成功の母である田川まつは、その田川七左衛門の娘として平戸で生まれ育ち、貿易を目的に上陸した鄭芝龍と出会い、1624年に福松（鄭成功）を生みました。

1640年頃になると田川まつは華僑の担当頭として長崎で陣頭指揮を取りました。やがて鄭芝龍の招きにより「まつ」は中国泉州に渡りました。この時代は徳川幕府が鎖国令を出し、外国にいる日本人の帰国を禁止した時期であり、2度と日本には戻れぬ覚悟の渡航でした。

その後、清の攻撃による泉州城陥落に際し、鄭芝龍は降伏しましたが、場内にいた「まつ」は降伏することなく応戦して泉州城内で自害し、日本女性の心意気を示しました。

鄭成功には弟がいましたが、田川姓を残すために平戸にとどまり、田川次郎左衛門（平戸藩士）として田川姓を受け継いでいきました。鄭成功との血縁関係もあるので、平戸藩では力を持っていました。

第17章 平戸焼と巨関（きよせき）について

平戸焼の始まりは、一般的には日本では以下のように言われています。

「今からおよそ400年前、豊臣秀吉が起こした朝鮮の役が終結した際、各地の大名は朝鮮の陶工を連れ帰った。平戸藩主である松浦鎮信も陶工を連れ帰った。そのなかに慶尚道熊川出身の巨関（こせき）と呼ばれる人物がいた。1598年、陶工の一人・巨関は帰化して今村姓を名乗り、藩主の命により平戸島中野村の中野窯で最初の窯を開いた」

この巨関という人物こそが、日本の肥前における磁器の生みの親であると私は考えています。

日本における磁器生産の始まりは、一般的には以下のように言われています。

「朝鮮の役（1592～1598）の際に佐賀藩主鍋島直茂によって連れて来られた朝鮮陶工の李參平なる人物が磁器の材料となる陶石を有田の泉山で1616年に発見し、そこから日本の磁器生産が始まった」

しかし、この李參平という人物については歴史研究者の間では間違った伝承であるとの見解がなされています。私も明治時代になって作られた物語上的人物であり、実在はしていないと思います。

やはり巨関が日本における最初の磁器生産の中心人物であり、その根拠はここでは述べませんが、私の著書「肥前磁器誕生の真説」のなかで述べています。

その後、私の巨関に対する考え方も変わってきて、最近では巨関は中国人だったのではないかと考えるようになりました。磁器を生産するということは大変なことであったので、当時は中国人が主力でやらないと出来なかつたことであろうと私は考えています。ただしこれについては確たる証拠がまだなく、私は中国側からの史料から今後分かることがないだろうかと思っています。

ただし巨関については中国側の認識がほとんどありません。まず巨関を考えるには、王直から始めないと平戸藩 자체も成り立たないのです。

第18章 唐臼について

肥前磁器の成り立ちを解き明かすためには、唐臼がどのようにしていつ伝わってきたかという問題を調べる必要があると思います。これがいつ伝わったのかについては日本側は分かっていません。分かっていることは、長崎の出島から伝わって、ちょうど1700年くらいに、隱元上人の文化事業や建築などとともに新しい技術を伝えていることくらいしか書いてありません。

様々な主張があって、少なくとも50年の差はあります。有田の主張では、1610年くらいには焼き出していると言っていますが、これは明らかに間違っています。

ここで重要なのが、景德鎮や磁州では、どのようにしていたかを検証することです。私は、肥前地区においては景德鎮や磁州を真似ているのではなくて、中国人の技術指導者が来て焼いていたのではないかと考えています。そして唐臼の作り方も、中国の技術者が来て作ったのだと、私は考えています。それが、日本が主張する1700年代ではなく、もっと前に焼いていたと思います。有田の南川原で、みんなが集まって焼き出したのだと思います。

とにかく、唐臼の日本における正確な起源がはっきりと分かっておらず、中国側で何らかの記録などが残っていないか検証してほしいと思っています。それにより、今現在有田が主張している肥前磁器の成り立ちの過程の歴史が間違っていることが自ずと明らかになると思います。

第19章 平戸三川内焼と鎮信流茶道

平戸焼の目的は、莫大な利益を追求することで、平戸中野窯で生産された磁器物は、中国の景德鎮磁器として売り捌きましたが、その考え方を変える社会情勢の変化が訪れました。

1630～40年頃、それまでの武士社会は下剋上を繰り返し、武力のみが正義として大名、幕府を誕生させました。ところが武士とは何者なんだろう、そういう問い合わせの時代が始まり、徳川幕府も揺るぎない世界を作っていました。外様大名の平戸藩は、武士の世界をどのように捉え、戦のない時代の武士とは何かを考えて、武士団を次の時代へ導く必要が生じました。

平戸中野窯も秘密の研究を経て、量産と品質向上に目処がたち、徳川幕府としても、平戸藩に対して白い焼物を生産することに異議を唱える時代環境ではなくなつたが、それでもなお改易の恐れを忘れることなく、用意周到に平戸が進む磁器の未来を茶道鎮信流が導いて指導する体制を築きました。平戸三川内焼は、職人が命を注ぎ込み世界の頂点を目指すことになりました。平戸鎮信流が求めたのは、これから時代の武士は、人の手本にならなくてはいけません。そのために文化を尊び、教養を学び、民のために死ねる覚悟を潔しとし、禅の教えを尊び己との戦いを鎮独する、凛とした姿勢で生き抜くことでした。その精神は、平戸三川内焼のなかにも生き続けています。

鎮信流とは、平戸藩松浦家に伝わる武家一大名茶道の一派です。流祖は松浦家二十九代当主、松浦鎮信（1622～1703年）です。それ以降、当代四十一代松浦宏月の代に至るまで、松浦家各代の当主によって継承されています。

平戸藩は、販売目的を捨てて武士として武士道精神を追い求め、鎮信茶道の指導を受け、将軍や天皇家の献上品作りに邁進しました。各大名に求められると、破格の価額で特別に販売しました。

一般には販売しなかった器のため、未だに理解されることなくベー

ルに包まれていています。研究者も研究することなく、真実が追求されない焼き物、有田物語に翻弄された器が平戸三川内焼です。

第20章 平戸焼の魅力

*販売目的の磁器物ではなく、美を求め、芸術を目指した焼き物です。一般向けの器ではありません。

*中国景德鎮磁器を手本に、景德鎮を凌駕することを目標に、感動させる器づくりに邁進した、茶道鎮信流とともに日々邁進した焼き物です。

*三川内山では、常に新しい仕事に挑戦し、家風として親の技術、芸術を越えなければ、一人前として認めてもらえない文化が育ちました。

「基本は白磁」

平戸の白磁は七色に変化します。純白ではありませんが、深い芸術性を感じます。薄く、固く、焼き上げています。

「染付」

吳須は自然石中国産を使うことにより、白磁のなかから湧き出るような発色や、ぼやけて見えるが凝視していると3Dのようにはっきり見えてきます。

「瑠璃鉄釉」

佐世保市烏帽子岳より産出する石（つば付き石）を使い、赤絵と違ひ肌地に染み込むため、剥がれることなく何百年も瑠璃色に輝き続けます。

「細工物」

些細な細かな部分にも気を配り、隙を見せず、凛として、よもやとすれば堅苦しいなか、ユーモラスな心温まる表現、喜怒哀楽を感じさせる、芸術性を追求する姿勢が感じられます。

「透かし彫り」

とにかく纖細に、土が乾かぬうちに纖細に作り上げます。

「置き上げ」

陶石を絵の具のように溶かし、乾いては塗り、乾いては塗りを繰り返し、積み上げて、無限の表現をしていきます。

*これらの技術を駆使して、平戸特有の美の追求と芸術への戦いに挑んだ焼き物です。私は、三度見に導かれ平戸焼に出会います。一度見は、離れたところから「おー、平戸焼かな」。二度見は、近くまで寄って「いやー、平戸焼たい」。三度見は、手に取って「やっぱり、すごかね、平戸焼は」。一人で微笑んでいます。

第21章 混合粘土と平戸中野窯

平戸中野に入った中国人陶工たちは、磁器生産技術の確立研究を目的とした研究用の窯を造ったのが始まりです。窯造りには、中国の技術者や技術を習得した者が行ない、磁器材料は中国からの密輸品を使い、だんだんと研究を進めて、韓国の陶石や肥前の陶石を使って、混合研究を深めていきました。混合粘土の考え方は、古くからあったもので、その他の多くの技法を使って研究を深めました。

最終目標は、「景德鎮を凌駕する磁器を作ること」。それが平戸松浦公との約束でした。

1600年頃には平戸中野窯では磁器が生産されていたと考えます。生産された磁器は、中国産の磁器物として販売していると考えられます。

中国産の陶石は、陶石ブレンドする必要のない魔法の陶石ですが、量産するには輸入の問題がありました。朝鮮産の陶石は有田泉陶石と似て扱いにくく、また陶石ブレンドするにも扱いにくく、これも輸入の問題がありました。

唯一平戸藩内で採れる陶石が網代陶石でした。網代陶石はブレンドすることによって芸術まで高めることができる不思議な陶石でした。この陶石は、1633年頃発見されたと言われていますが、平戸中野窯で使用された痕跡があります。

第22章 網代陶石

折に触れて網代陶石の陶石ブレンドについて触れていますが、平戸三川内焼を語るとき、網代陶石を語らなければいけないほど重要な陶石なのです。

この陶石をブレンドすれば、呉須の染み込みができ、薄つくり、細工物、置き上げ、透かし彫り、貼り付け等々、芸術にまで技術を高めることができた陶石です。

網代陶石は針尾島三ヶ岳網代にて発見された陶石ですが、道がなく船による海上輸送のみでした。この陶石の発見は1633年頃と言われていますが、私は平戸藩唯一の陶石ですので、1610年頃ではないかと推測しています。

平戸中野窯ではいろいろな陶石をブレンドする研究がされました。網代陶石もその痕跡がありました。その中で使えたのが、波佐見三股陶石とのブレンドです。

平戸中野窯は三川内山へ移動するのですが、なぜ移動しなければならなかったのか、確かなことは分かっていません。もともと中野窯は研究目的の窯であり量産目的の窯ではありませんでした。量産できる条件が整ったので、窯移動の大問題に着手したのではないかと私は思います。その条件とは、以下のようなものであったと考えています。

- ・幕府側に秘密にする必要がなくなったこと
- ・量産計画が出来上がったこと
- ・資金の調達もできしたこと
- ・人材の確保の問題も解決できしたこと

三川内山への窯移動は計画通りに、まずはダミー窯を長葉山に作り幕府側にはただの土物窯と思わせて、人材を集めて用意周到に時間をかけて準備しました。1625年から1650年頃までの30年間という年月をかけて移動しました。

網代陶石と波佐見三股陶石のブレンドがなければ、窯の移動も遅

くなり、場所も違っていたと思います。このブレンド陶石ですが、肌地が黒いために天草陶石が見つかると、網代陶石と天草陶石のブレンドにとって代わられます。この新しいブレンド陶石は名コンビでしたが、明治20年明治政府と有田の圧力によって幻になった経緯があります。（1645～1887年）

網代陶石がなければ平戸三川内焼は生き続けることができたのか、ましてや將軍家や天皇家に献上することができただろうか、疑問に思います。

天草陶石は、1605年には中野窯で研究されていますが、キリシタン問題があって天草が天領となり、事態が落ち着くまで使うことができませんでした。

波佐見三股陶石は1633年に発見されましたが、この陶石は肌地が黒地という問題がありますが、ブレンドするには相性の良い陶石でした。

有田泉陶石は、1615年頃に発見されましたが、これはブレンドするには不向きな陶石でしたが、鍋島藩による陶石管理が厳しいという問題がありました。

上記のような内容を考え合わせると、平戸中野窯の使命が分かります。そして三川内山への窯移動となります。

- ・平戸中野窯は研究目的の窯
- ・肥前地区で初めての本格的な磁器窯
- ・中国景德鎮を手本に研究
- ・幕府に秘密に研究し販売した
- ・他藩へ危険を顧みず陶石の探索活動をした
- ・平戸藩の密貿易が中野窯を支えた
- ・中国人を中心に研究がなされた
- ・量産できる目処をつけ量産計画を立てた
- ・平戸中野窯は中国のどこの産地の様式の窯で作られたのかを研究する必要があります。近年の研究で、有田地区の窯は中国徳化窯の様式の技術で作られたことが分かりました。

第23章 伊万里港と平戸藩

伊万里港の話をする前に、なぜ研究者の皆さんには、明治20年に有田が作った「有田物語」の影響を受けて、肥前磁器誕生の真実を歪曲したまま本当の真実を追及しないのでしょうか。すでに九州陶磁文化館による有田地区窯発掘調査により、李參平は創り上げられた人物で、肥前地区での磁器誕生を迎えるのは1640年頃であることは事実となりましたが、これは公には公表されていません。時代的に鄭一族が中国徳化窯を支配した時代で、有田地区の磁器窯は、徳化窯の磁器窯であることが判明していますが、黙認されています。

したがって私は、九州陶磁文化館へ40年前に出向き、「磁器発祥の起源について、有田ばかりに目を向けるのではなく、肥前地区全体をとらえて考えてほしい」と申し入れをしました。また10年ほど前には、学芸員とこのことについて論議をしましたが、「田中さん、不毛な論議はやめましょう」と言われてしまいました。さて、本題に入ります。

(1610年頃) 海人平戸氏と海人伊万里氏との倭寇としての繋がりは深く、海上路にて肥前磁器探索行動をしています。肥前に行くには海路が一番安全で、潮の満ち引きに合わせて速く行動出来ました。平戸焼棟梁巨関は、岸岳5窯より移動していた椎野峰を訪ねています。理由については、第7章平戸中野窯に記述しています。平戸藩は、その都度巨関の肥前行きの申し出を快諾し、隅々まで詳しい情報を与えました。

1630年頃、鄭一族の陶磁器生産に応えるためには、平戸一国では解決できず、肥前地区での量産計画に変更しました。積出港を整備し、平戸港へ陸上げするベストな港として伊万里港を選びました。平戸には経験として優れた海外貿易システム（船場制度）があります。外国船には平戸までと限定し、国内輸送は商人たちが行いました。もちろん、これだけの重大事項でしたから、徳川幕府の内々

の御沙汰を受けて始められました。したがって伊万里港には、北前船を代表とする商人たちの船だけが入港しました。（1635～1640年）

1641年、幕府は海外貿易の窓口を長崎港一つにした鎖国政策に転換し、平戸藩はこれに恭順しました。隣藩との交渉は難航することが予想されましたが、幕府の御沙汰により問題は解決しました。もっとも鍋島藩は、そのころは磁器生産には興味がなく、森林管理程度の考え方でした。しかし、現場では様々な問題が生じてきました。これらの問題を解決するためには、何人かのフィクサーが必要でした。巨関、前田徳左衛門＝東島徳左衛門、有田初代代官山本神右衛門その他数名のフィクサーの存在が考えられますが、今後の研究が必要です。

1641年以降の長崎港と伊万里港との関係については、今後の研究に委ねたいと思います。

平戸藩は貿易システムを熟知した人材（今村氏）を長崎へ送りました。唐人町の町づくりも平戸藩が行いました。田川マツも唐船の陣頭指揮（鄭芝龍の代わりに元平戸藩家老籠手田氏を頼り）のため長崎へ行きました。

1680年代になると、鄭一族は清に敗れ、肥前の磁器物はその販売先を失い、中国磁器が大量に市場へ出回ったため、オランダ商船のみの販売になっていました。幕府としても、鍋島・大村は国内販売に力を入れるように沙汰を出し、平戸藩に対しては国内販売を認めず、藩窯としての機能だけを認めました。

長崎～伊万里の航路は、1700年代に入ると、各産地はそれぞれの考え方で長崎へ運びました。国内航路としての伊万里が北前船によって越前、上越。北海道へ日本海ルート。大阪を経由し江戸へ向かう瀬戸内海ルート。熊本、鹿児島、宮崎へは有明海ルート。長崎へは、早岐、川棚、彼杵を経由する大村湾ルート。

これらについては今後の研究に委ねたいと思います。

